

赤い花の咲く頃：文苑

著者	栗林，卯平
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 6
ページ	5 0 - 7 1
発行年	1912-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6366

赤い花の咲く頃

甲 南 生

赤い花が又咲いた。

昨日からの雨はしどくど小止なく降り續いて、薄ら寒い、暮春の窓に、風が小さな音を立て、過ぎた後は、ひっそりと大風の風いだ様に、四邊^{あたり}の物は、息をひそめて、雨に濡れた庭の植木に、灰白い霧の群が低く糢糊と搖れてる間を雨脚は、しめやかな音を立て、面白く降り灑いだ。向うの屋根に、ザワ／＼と鳴る一列の防風林が蜘蛛の手の様に、八方へ枝を擴げて、濃い影をなした下に、朽ちた、板廂の小屋が、寂しく立つて居る。そうして其が時々怪しげな音を立て、泣いた。飛石の兩側に、廣々と展げた、芝生は、濃緑に煌く様な細長い葉を降り續く雨に面白くなぶらせて、高く低く、乱調子に彈ねる度に、夢の様な白玉はハラ／＼と地に碎けて、消えた。便所の側の霧島躑躅は黒い葉陰に、所々、白い花を残して、其の向側に夢見る様な赤い花は頂垂れた儘咲いて居る。名は、何と言つたか、南洋の土人の戀を思はす様な芳烈な花葩はペンガラ色に燃え立つて、ケバケバしい其の色彩は目覺むる計りに美はしく、合間合間に漂うて来る淡々しい其の香——其の香が犇々と迫る様に胸を抑えて、丁度例に様なき身震が全身にすうつと泌み渡ると、魂は何時とはなしに、あの頃に移つて行つた。

其は長い昔話である、其の話の順序として、私は少しく、私の生ひ立を書かねばならぬ。

神話に名高い霧島の山脈は大隅半島の南から北へと柔かな線を描いて、九州を南北の二つに分つた。山の南は、照る日の影も暖かに、汪洋たる、支那海から吹き暮る南風は、淡い、滑らかな色彩を到る所の自然に、たれて、紺青の大空に、クッ、キリと浮び出た山々——水々しい果物の匂とは激しい南國の情緒を迫る様に、人々の胸に印して、艶かしい戀物語が、ザア、と寄せては返す黒潮の調と共に、櫻吹雪の夕月夜に絶わなかつた。が、水蒸氣の多いのは山の北部の特色である。夜毎の枕に滄苔と響く日向灘の濤聲は、暗い陰鬱な中年の女が、嗚咽く様な北國の空を思はすに十分であつた。濱街道を飛ばし行く、ガタ馬車の喇叭が雨催の空に、響く頃は、漂泊の思に堪へぬ旅人の、振り返り越し方の山々に、太古めいた。其の匂を嗅ぐに違ひない。此の二つの地勢が自づと衝突する所に高峻な山々は薄紫の滑かな肌を、遠く霞の裡に包ませて、屏風の如くに流れた。美しい悲しい夢は永い事此處に秘められた。

今は昔、福原の里に、三代の榮華を忍んで、盡きぬ都落の愁を、一谷、屋島と東夷に追はれ追はれて、西風も悲しく愁を壇浦曲に勇ましい没落を残した平家の殘黨は僅かに此處を脱れ得た。見渡せば、三十六灘行々、盡きんとするの邊鎮西の山は高く空に聳れて、草の岬にも、心を置く可き、落人の群は、奥へ奥へと峯を、渡つて、白鳥山の中腹に、淋しい別天地を開いた五家庄は此所である。櫟や桐の木蔭に、今も獨御殿風の破屋は谷に臨み、家々に引いた寛の音が淋くし響く。

一夏を此所に暮して、朝夕、百合の咲く水涯に、遠き、遠き古の夢の匂がむと憧る、人々は落ち積、りし朽葉の香と濕つばい土の香と混雜に漂ゆる水層岩の下より、玉の様な美くしい流が幾條となく、迸走る

のを見るであらう。

其の流れの一條は山の南へ折れて、内大臣山の麓より凄まじい音を立て、到る所の絶壁に、淫々たる瀧を落し、更に幾度か瀨を作り淀を湛へて川下五里の所より、洋々たる大河の趣を備へた。川は即ち緑川である。私の故郷は此の河岸に沿へる蕭條たる一條町であつた。

町上に俗に築と言ふ捕魚場がある、八九月の頃緑川の水が溢れて、日頃は藍々溶かした様な流れは幾日も幾日も濁つた儘に流れる。尺に近い鮎の群は、肌寒い濁水に、押され押されて、もう、遡る力も無く、川下の方へ頭を向ける。此の頃を見計つて本流から大きな溝渠に、水を通じ、其の行きつまりに、孟素竹の大きなのを、強そゝうな縄で、あんだ、簾の中に水は淫々と瀨をなして落ちる。江に臨める旗亭に清酒の杯を引いて、夕月の影を満身に浴び乍ら綾なす浪のうねりに、ぢつと瞳を握ゆれば、連日の洪水に疲れた、鮎、鯉、鮒などが列を作つて面白く躍る。

昔は五十四万石の殿様が年に一度の遊覧場として町は、湧く様に賑合つた。力と言ふ無上の權威の外には、何物をも認め無い、物々しき其の行列、——奥仕の御女中の乗物がヒタと此の町に止ると、流に沿へる高樓にサンザめく三昧の音締は夜を通して、鳴り響いた。曳船の歌は、長閑に、霞の底に震ひ、遊女屋は年毎に榮えた。抱への女が變る毎に勞働と、肉樂との外には、目的も意義も無い旅人は、楊柳の陰に、後朝の別を惜しんだ遊女の顔を胸に描いて、誇りがに人に語つた。新開地には新しい店——物賣る家が日に月に數を殖やした。

其が御維新になつて、急に、火の消えた様に、町は沈んだ。道は彼方此方に縦横に通じて、今迄直接に取扱

つた、上方との取引は、中間に屈起した、大都會の爲に奪ひ取られて、先に一應集つた物産は集る事なしに方々へ賣られた。遊女屋も一軒減り二軒減りした。

十年の戦は突如として、人々の夢を驚かした。長い間、肥後の山野は、慄慄な薩摩隼人の蹂躪にまかせて、恐しい悲しい噂は水の如く、隨所に擴がつた。

激しい木葉の戦も終んで、賊は日毎に、南の方へ退いた。そうして其の途すがら、到る所の村々の家を焼いた。立枯した儘の並木、――^焦し臭い、土の香――生々しい殺戮の跡は荒涼たる戦場の名残を忍はせて、此の町も亦、免かれ難い運命を蒙つたのであつた。昔の大厦高樓は見る影もなく、後に建てられた白木の家は、見すばらしい草葺が多かつた。

『あの頃は町も仲々賑合ひましたなあ』
老人の一人は何時もある當時を思出して、感慨に堪へぬ様な口をきいた。

『此の町の方側が例の女郎屋で、優美な化粧をしぬいた妙齡の男女が朝から晩まで、楽しさうに歌つて、三味線太鼓の囃は絶わな事はなかつた。旅役者が來たかと思ふと義太夫が来る。町の人々は、楽しい響の中に浮かれて居た。まあ御覽なさい。今は、斯うして、大通りに破草履か所々へ散ばつてゐる計りだ。昔は端歌の一つや二つに美くしい咽喉を見せたがもう斯うなつちや張合がない』

かくて繁華な町は感じの善い町に變つた。感じの善い町は零落した姿に變つた。平和と安靜と言ふ氣分は町の何所にも漂うて居た。

烈しい世間の生存競争に打勝つて飽く迄も緊張した、自己の專横な生活に刹那から刹那に動いて止まぬ本能

の衝動にまかせて、享樂の美味に酔ひたい——新らしい刺戟に生き度と云ふ望は人々の心にはなかつた。半世紀の幕を隔て、賑やかな當時の面影を、嘘交りの話に生かして、唯だ楽しむと云ふ事の外には、もう一度此の疲れた町の景況を昔の儘に返して、永く永く其の浪漫的な實質を残し度と云ふ事は思はなかつた。貧しい日常の生活に満足して、濕っぽい土色に朽ちた屋根裏に、生氣の無い顔をして、暮した。

私の家は町から少し入り込んだ、奥まりたる所にあつた。夏は門前の百日紅が紅く咲いて散つた。木槿の花が薄ら寒い秋風に吹かれ、吹かれて、其の弱々しい香が雨上りの空に仄に薫る頃は、枯柳の枝が寂しく靡いた。

私は父と云ふ者を知らなかつた。父は早く死んで、母の手一つで育てられた。そうして、母から洩れる斷々な話に依て、父の性格の大凡は窺ふ事が出来た。田舎の舊家に能く見る、寛した、家長らしき威嚴——そりや、大旦那様は温和しい人で御座いましたよ、と云ふ家附の老婢が口に合せても、——其の威嚴は十分にあつた様に思はれる。

母は其の頃は、年も未だ若かつた。若後家で通しただけに、キビキビした勝氣な處も見えたが、一体に優しい涙もろい性であつた。

父知らず、と言ふ不幸な境遇を悲しみ、後れ勝な私の頭を、出来るだけの優味と慈愛とに温めて呉れた。若い文字に憧るゝ様な血汐は、母の血管を流れてゐた。柑子の花の白う咲いた晩。

『時は暮れゆく春よりぞ、又短きは無かるらん。恨は友の別より、更に永きはなかるらん。君を送りて、花匠き、高樓までも來て見れば』

細い透き通る様な聲で、能く藤村の詩を歌つた。

美しい女の肉聲が、少し震を帯びて、メロテイの豊かな節廻しは、どんなに、稚さい私の頭に響いた事で、あらう。

初々しい血汐は母の頬を染めた。美はしい前半生の追懷は、静脈管の底にホト、ホトと鳴る、血汐に、楽しい年頃の歡と、自由——放逸な處女が、唯だ憧れて行く Erosion の姿を、複雑な中年の頭に、描き出して、處女らしい處女の心に立ち歸つた様に、恍惚と潤んだ明暉は燃ゆる計りに輝いて、上目使ふ空を仰げる其の視線が、一瞬閃いたと思ふ間もなく、私は、母の手に抱かれて居た。

寛した父の氣分と、感傷的な母の性質とを等分に受けついだ私は温和しい、氣の弱い小供であつた。

未だ小供の騒々しい。——例へば八分に滿された空氣枕の一方を抑へば抑へる程、脱れ様とする空氣が、一所に高く集つて、強い抵抗力を作る様に、唯だ遊び度と言ふ外には、意義も無い、少年の力が旗遊び、相撲、繩飛びと言ふ、荒々しい遊戲に表れて出るのは疑はしい事ではなかつた。赤味を帯びた強さうな小供の群は楽しい遊に時を忘れて、日毎の夕を悲しい目附をして送つた。そうして私も亦、烈しい周圍の力に動されて、不本意な仲間入を余儀なくせられた。

然し私の嗜好と、感傷的な性格とは、斯う云ふ事に、身を屈して、自由な自分の領土を、一步侵す事を許さなかつた。脱れ度と言ふ心と、孤獨と言ふ氣分とは、等しく私の体を抱いて、其から出る一條の道は、優しい母の手に抱かれて、思ふ程に少年の喜に震へ度と云ふ事であつた。

郊外の夕は私の好んで歩いた所である。

午後の日脚は漸く西に傾て、並木の影は細永く震へた。野は静かに、山々は眠に入らんとして、一際赤く輝いた峯の光も、次第に鈍色に暈けて、夕の色は悲しく溶け初めた。草の匂は斷々に、花はシツトリと露に濡れて、幾夜の淡き夢の思を小さく洩らす溝渠に沿うて、土橋の危きを渡り、田圃の間に交錯して通へる小道をつき切つて、小高い丘の上に立つた。縁を赤く染めた雲の群は、吸ひ込まれた様に大空に溶けて、其の底から星は覗く様に輝く。

其の星明の下に一條の道は仄白く、又田圃の間を縫うて熊笹の多い畔へ出た。其所には小さい瓢箪形の池が氣味悪い程に、藍光の浪を湛へて、杉本立の蔭が暗く水に落ちた所に、默然として星影が射した。

不圖、寂しいが然し引締つた冷水を浴びた様な震が私の体を通つた。岸の草叢に名も無い虫がホロホロと鳴いた。

其は美くしい夢の様な物語である。昔——此町に名高い長者が住んで居た。或る年の暮、京の畫師は長い漂泊の旅疲れて私の町に流れて來た、娘の京は一夜切ない戀を叫いたが、畫師は應じなかつた。そうして、嚴肅なる、藝術の爲に、一身の名利を捨て、飄然として、顧みない畫家の一生は狭い雰圍氣の中に醒醒として、人間の夢想にのみ生きる事を許さなかつた。彼は一枚の形見の繪を残して、風の様に去つた。丁度木瓜の花の咲く頃であつた。狂はしい氣に亂れて處女心に堪へ兼ねた京は、畫師が残した繪を抱た儘、身を投げたと云ふ此池、——美くしい話は長く土地に残された。そうして、星明りの晩に、其の畔に佇むと、水の底より悲しい女の泣聲が糸の様に洩れると迄傳へられた。

水は靜に光つて居る。私の意識は氷の如く冷く澄んで、今にも其の池がブクブクと泡立ち、晝に見た女——話に聞いたた京の姿が、江戸紫の振袖を抱いて、微笑と浮出る様に思はれた。

不圖、名が呼ばれた。其がどうも聞いた様な聲である。私は耳を傾けて、一心に水の面を睨んだ。水は依然として靜かである。

『——さん』

聲は二度耳に響いた。そうして其の聲は一層近くに聞えた。私の耳は急に耳鳴りがし、足はワナワナと震へた。

『まあ、此の人は可笑な人だよ、さあ歸りましよ』

姉は道々面白い話を聞かしたり、小さな聲で歌つたりして、連れて歸つた。

十四の年に私は恐しい病に襲はれた。其が爲に學校の方も二年計り後れた。今思へば其の病は私の生涯に忘れる事の出来ない、過渡期の出来事であつた。

慘な病人生活から起る苦痛と寂寥とに上りな今迄の感情は、鋭く且深くなつた。唯だ、もう疲れた肉の衰を沁々感じて、力なく白いベッドの上に倒れて遺瀨ない悲哀に嘆いた心は、僅に古の歌物語や今の若い人々の悲しい身の上に移されて、氣紛れな暮しをなす事が出来た。若い血をそゝのかす様な新らしい智識が手觸の善い紙の上に躍る様に描かれて、其から出る滾々として盡きざる情趣は如何に私の胸に觸れた事であらう。感じ易い少年の感覺は、見る者毎に其の小かな魂を躍らしてわひわる様な感受性は、鋭く且つ他方面に閃い

たが寂しい大きな手は神經の中樞をちつと抑へて孤獨な遣瀨ない生活は永く、私の体を抱擁した。仲間はずれは遠く私の周圍から顔を反けて去つた。

冷い時と云ふ方に刻まれて煩はしい教權の下に、漸く延びかけて居た自由の芽生を見る影もなく蹂躪せられて、勉めよー柔順、なれど、眞面目な顔をして説く、教師の言葉に、唯、機械の様に屈從した、仲間の慘を思ひ遣る時、私の心は獨り、其等の雰圍氣から脱れて、身も魂も香に搖ぐ少年の果し無き歡に震ふ孤獨の勝利と云ふ事を考へた。

其の頃町に新らしく製材所が建てられた。白鳥鮮見の山々に生ひ茂つた老木は、緑川の水運に依り筏の儘で乗り下し、或は又、古風な牛車に乗せて、どしどし町へ運ばれた。暫く立つて澤山の職工は其の首領らしい人に連れられて、どやどや遣つて來た。

町の人々は此の見馴れぬ外來者に對して、如何にも落付の無い、そはそはした、疑はしい眼を見張つて、其の成行を窺うた。漢籍や新聞に頭を固めて、町一番の物識と言はれた人々は、毒々しい赤錆に喰込れて回りの善い機關がばつたりと急に運轉を停止した様に、全盛の町が段々と衰へて、今は父祖代々、受けついで、遺産と土地から上る僅か計りの収入とに依つて、北部ロシアの農民の様な生活を續けてる、此町の景氣が放縱な、そうして金放れの善い職人の群から回復せられて生き生きした、昔の狀態に、立ち歸る事が出來はしまいかと喜んだ、が人の心は妙な者で五十年の習慣——零落した町は何處迄も淋しい零落した町であると云ふ不思議な程超越した印象は「諦」と言ふ一種落付いた形の中に影をかくして、燃ゆる様な向上の念も、烈し

い競争の執着も大部分の人の願る所ではなくて、町の平和と歴史とは如何にして續けらる可きかと云ふ事が主要なる考であつたらしい。

或る日、私は學校で見馴れぬ人に出會つた。

誰だらう——小さな瞳は一齊に其の人に集つて人々は銘々勝手な空想に、驚きと疑ひとを結んで、他愛もない少年の噂に時を移した。

「一体、誰だい」生徒は期せずして叫んだ。

大空に漂ふ雲の影も搖ぎだにせぬ靜かな深淵に、氣紛れな心から、そつと、投げし小石の波の擴がつて、岸に小さな音を立てる様に、二百戸の苦しい世界に夢を見て居た、人々は唯、一人の新らしい生徒に、話は種々と噂を生んで、鈍い其の理解は全体に、容易ならぬ輿論を起した、そうして、遂には其の人は製材所の高橋さんの坊つちやんであらうと云ふ事に相談は落ちて行つた。

間も無く、鐘が鳴つた。生徒はドヤ／＼と教場へ流れ込んだ。私は獨り後れて最後に自分の席に就いた。やがて教師が一々生徒の名を讀み上る。

「高橋」

私の斜向ウニ温和しく席に就いて居た其の人は小さい確した聲で答へた。人々は眼を光らした。

其の翌日も高橋と云ふ人は運動場の隅を彼方此方歩いて居た。時々立ち止つてと目遣に、空を仰いだ。南に走る國境の山々は模糊として、夢の様に見わる。日は暖かに彼の背を照らした。

生徒は思々に、種々の遊戲に耽つた。旗遊び、兵隊ゴッコ繩飛び、方々に関の聲を揚げて、囃し立てた。

痛ましい内省の氣分——丁度茫々たる曠野の果に入日の影を惜みて、堪へ難き中心の孤獨に、友と放れ遊と放れ、途を失ひし羊の如く、頽廢せる自分の心持に、「迷へよ」と思付た私は、唯、當もなき想像にしつくりと穩な周圍の自然に憧れて、運動場の隅に空を仰いで横はる事が多かつた。

小さい乍らも、一人の外來者に對して、自己と云ふ動し難い位置を考へ、そうして、其の人の踏んだ世界と自己の經て來た世界との間に大きな距のあるのを見出す時、嫉怒、猜疑、不安、——其の他有らゆる淺間しい人間の感情に駆られて、凄しい其の鋒先をさし向けるのは土地に固着せんとする人々の状態である。高橋君も亦此の免かれ難い迫害を蒙つたのであつた。

斯くて寂しい遺瀨ない日の生活の中に、自己と自分の影に一層ひさしほの力を感じて波瀾の多い、連續せる背景には中心の望が徐々と外へ向けられた、此の機會は私と高橋君とを永久に結び付ける楔であつた。

最早や私は古き道德、古き權威、古き服従と云ふ者を保つ事は出来なかつた。認証を失はれたる、其等の者は唯、一つの空文字に過ぎない。今は空々、寂々、自由な新しい世界の舞台に踏み出して、高橋と云ふ私に相應しい共鳴を見出したのである。

何だか、生温るい、弱い、優しい血は高橋に觸れて以來私の体に濡れて、心はピアノの盤上を走る指の様に躍つて行つた。

私は是迄自己と云ふ者を自分から放して見る事は出来なかつた。そうして忘るゝ事も出来なかつた。温き

憧に、私の血は震へて、漸々に熱して來る其の情緒が凄まじい、奔放な力を以て、美々しい色彩の中に私を引き込まうとする時、愕然として、覺めた――。其は冷い自我と云ふ叫聲である。單純なる私の性格は、不思議にも兩面に働いて理智と感情――憧憬と抑壓――此の二つの衝突矛盾に、うら若き青春の日を自ら悶々の裡に暮して、頭は常に新らしい者に憧れても、心は自分の位置――地方に於ける舊家の家風と云ふ者を忘れなかつた。

廣々とした引締りの無い私の屋敷は二人の望を入るゝに相應しい場所であつた。自由な拘束のない空氣は屋敷の到る處に溢れて、情熱の深い母の唇から洩れる新らしい力ある話は二人の胸に烙印の様な印象を残した。繪草紙――八犬傳――三國誌――古い紙の香を嗅ぎ乍ら、虫蝕のした其の頁々に吸ひ込まれる様な考を抱いて信乃の涙ある情や、孔明の奇策に氣拔のした様な日を送つた。

二人は好んで郊外を歩いた、

一冬を山に積りし雪も漸々に溶け初て、緑川の流は急に水嵩を増した、流に沿へる山櫻は、惶しい花の盛を颯々と吹く川風に一片二片吸ひ込れる様に散つた、川には鮎の子も追々に育ち、淫々と響く瀬の流れて早き淺瀬には、若鮎の群が白い腹を反して、若芽に脹らむだ川柳の下をスイスイと上る、土手の草は青く崩れ草花も所々に咲いた。

滅入る様な冬の眺に、氷の様に結ばれた二人の胸は新らしい光、新らしい匂に、血は若く躍つた。抑へられた其の力は頭を擡げて「自分等の世界」と云ふ事を意識し乍ら大きく腕を振つて夢の様な春光の裡に自分と云ふ者を溶かして仕舞ひたかつた。

道々二人は若い話に時を移した、乳色の雲は春の日に車前草を喰む小羊の毛の様にふはりと温味を帯びて、羽織越に射し込む日の光は皮膚に柔らかな手觸を思はせた。

暫く歩いた後で少し疲れを覺えた。二人は芝生の上に身を投げて、額に手を押し當て乍ら何時までも此の歡と光との融和した白日まひるの土手に蒸す様な草の、いきれを嗅ぎ、夢の様な響の裡に、身を溶かし、因襲と束縛とを忘れ、時と云ふ者を永遠に、吾等の記憶から取り去る事が出来たらはと思つた。

彼は瞳を上げて、細目に、水と空とを交々に眺めた。純白な頬には初々しい、葡萄酒の様な紅が「友情」と云ふ象徴シムボルを仄に表して魂の搖ぐ所に、微な笑が上つた。

『若し之が女だつたら』

私は深く吐息した。

靈祭も終んで烈しい夏の光は、朝晩に寄する風に拭ふ様に消えた。垣根の朝顔は次第に輪が小さくなり露を帯びた芙蓉は到る所に紅白の色を漂はす頃となつた。

『秋と云ふ感じは取り更の着物の上に著しく表れて流行を趁ふ浴衣のケバケバしい模様から手織縞の相應しい裕姿が、偽の無い里の人を一層引立たして見せた、稻はたわゝに、熟れて、粟の取入れが一仕切終むと、後から起る野の戦は、農夫の新らしい喜の中に開かれた。糠すりの音は夜毎、日毎に、不規則な調子を立てた。吸ひ込む様な秋晴の空に、白う流れた。煙は、日影を暈かして、柳の木蔭に晝風呂を浴びた後は甦る様な心身の力を感じて「戦」から「休息」に入るべき平和な安息日が遣つて來た。』

俵は高く庭口に積まれ、紡立ての生糸は油紙に包まれた儘、堅く棚に仕舞はれた。

博多帯を引き締めて、意氣な羽織を着流した繭商人の一群は相場の評價を大聲に怒鳴り乍ら馴れた腰を低く屈めて繭賣る家を回るのも此の頃である。目に付き易い路の回角に添物進呈と赤い、インキで書き添へた冬物賣出しの廣告が人々に思々の心を起さした。

やがて、紺白取々の幟が高く空に震へた。柿の實は赤く梢に熟れて、栗は重陽の節句に祝はれた。周圍は何となく動搖めき人々は歡の中に村祭を迎へた。

長い勞作の後に起る、放縱な生活は人々の頭にあつた。年中行事の唯だ一の自由な歡ばしい祭を一年の忘れ難い思出の日として、人々は如何に賑やかに、思つた事であらう。

夜が明けて間もない頃太鼓の音は犇々と深い靄の内に響いた、人々は思々の粧をこらして、ゾロゾロと雪崩の様に社の方へ行つた。新しい望、新しい光は人々の眉宇に溢れて、紺の香の強いのを嗅いでも其の滑らかな手觸と色彩を思はずには居られなかつた。道の兩側に、物賣る店は玩具、果物、菓子、人々の目に付き易い様に並べてあつた。

こんな日には二人は機械の様に歩いた。眩しい秋の日を眞面に受けて、斯う軽い、跳反むだ様な調子に乗つて「郷土」と云ふ印象を深く頭につめて、流れる様な日光の中に唯だ二つの世界——捨てられた今の町と榮耀な古の町とを考へて見た。そうして、自分等の狭い經驗と遺跡と云ふ者に乏しい町の風致とは著しく、二人の感興を殺いで其から起る痛ましい追憶と、情緒とは二人に痛々しい思をさせた。

「行かう」二人は期せずして叫んだ。

小屋掛をした俄造の舞台には、紅白の幔幕を打ち廻して、日の暮れる頃から群衆は溢るゝ様に見えた。カンテラの油煙はぼうつと場内をこめた。髪の毛の香白紛の匂に咽せる様な厚くるしい空氣に人々は心持ち上氣した頬を眞赤に染めて、戦く様な血の震へに唸る様な聲を上げた。

舞台の上に旅役者は唯、土偶の様に働いた。偶には態どらしい動作が滑稽にも思はれたが、藝術の形見とも云ふ可き古の浪漫的な氣分が此の様な放浪者の手から手に傳へられて、其の面影だけでも吾々の眼前に見せて呉れる面白さに、二人は武家時代に立ち歸つた様に種々と勝手な空想に耽つた。

其の晩二人は川風に吹かれ乍ら、遅く迄話した。そうして、二人の間に單純な少年の感情から、複雑した心理に入つたと云ふ事を考へて、若き日に別れんとする悲哀——過渡期の苦は仲々頭を去らなかつた。

かくて二年間の長い様で短い歲月——此の間に世の風潮は刻々に變り、日露と云ふ大きな戦争の結果は西洋の新らしい思想を入れて、在來の思想界は内面から其の形式を破られた。北歐露西亞の文學が新らしい作家の手に依つて、日本の文壇に紹介せられたのも此の頃である。自然派作物は長い間若い人々の頭に沁み、一方にはチオローマンチズムの流行となり、懷疑、動搖、不安、因襲の破壊となり自己の解放が叫ばれて、騒々しい思想界の有様を、貧弱なる雜誌の智識に導かれて、新人の悲と云ふ者を味うて見た。冷いが然し、何所となく温味のある涙は此の頃二人の頬に能く流れた。

新舊の争は、過渡期に於る、見脱し難い事實である。在來の道德因襲に抵抗すべく、勇ましく奮起せる新

らしい人々の努力は、二千年來の歴史、習慣とを破る事は出来なかつた。動搖せる思想界は依然として、動搖した。此の渦中に巻き込まれた吾々は、統一せる何等の徹底せる結果をも見ずして、幻滅と云ふ事を意識し乍ら、猶新らしい事實の上に立てなかつた。

「さうでも善い」

斯う捨鉢な氣にもなつた。然し其の歸趣に迷つたのは事實である。

斯かる紛糾と不安の内に二人の別るべき日が來た。

刺戟にも疲れた。唯だ、此の儘、放縱な自分の生涯を満して、新思想に憧れ度と云ふ外には、殆んど總ての望を忘れてゐた、私は、母の勸で中學に入る様になつた。「出来るなら脱れ度い」斯う思つて幾度か母に願つた。

私と云ふ者の外には愛情の總てをなくした優しいが然し家風、家憲と云ふ事を重んずる勝氣な母は此の時、計りは許して呉れなかつた。

寮の外に雨のシトシトと降る晩十燭光の電燈の下に座つて私は獨り友を思ふた。束縛を脱れ様とする心と、因襲を打破しようとする心とが此の時程烈しい事はなかつた。

私の周圍に在る人々は皆な晴れやかな顔に晴れやかな望を抱てスヤスヤと眠つて居る、そうして、時々洩れる、うわ語にも張り切れぬ自分の歡を語つて居るのである。之を見ると、此でも同じい人かと云ふよりは、私とは全く關係のない、別世界の人の様に思はれた。

私の体は魂の抜けた私であつた。乳色の雲に朝日が美々しく射す、この様な朝には必と、グラウンドの隅に立つて國境の山々に思を馳せる。悲しい遺瀨ない愁が胸の底を流れて、涙は頬を傳うて流れた。鹽鹹い其味が舌の味覺に觸れると涙を流したあの頃——二年間の短いが、然し波瀾の多いあの頃に移つて行つて空想の多い日を送つた。

そうして、空想から空想、此の空想は何時しか長い手紙となつて、翌の日、雜誌と共にポストの中へ入れられた。

別れて二ヶ月は夢の間に過ぎた。五月の末の或る日、寮生一同は近い海岸の港町へ遠足に出かけた。そうして、大通へ瓦斯燈の灯が眩しく、とばされた頃に一日の楽しい印象を土産に歸つて行つた。

人々は思々に、水を浴びたり、湯に入つたりして、膳に向つた。其が終むと、楽しい食後の二時間が得られた。

私は疲れた脚を投げて窓の外を眺めて居た、其所に小使が一通の手紙を持つて來た。優しい女文字の封筒は高橋の御母様からであると云ふ事を思はせた。其には斯う書いてあつた。

『勝事、永々病氣の所先日遂に死去仕候、早速御通知申上ぐべき筈に御座候ひしも小試験前と承りわ

ざと差控へ候ひし段不惡御思召被下度候、唯だ一人と頼みし子に別れし心中御察し被下度候』

そうして最後に

『頼りなき身の旅の生活も一層に苦しう存じ候へば遺骸を抱いて、其の儘郷里に歸り居申候御暇にも

候はど何時か御立ち寄被下度、種々と御話し申上げ度き事も有候』と書き添へてあつた。

悲痛な殆ど名の無い様な震へは、急に、私の血汐の運行を止らせた。

「死んだか」

斯う言つて、電氣に觸れた様に立ち上つた。

寮の庭は白く月光に濡れて、月見草が淋しう咲いた。松に鳴る風の音は、遠い黄泉の國に響く鉦の様に思はれた。

「死んだか」——二度び私は繰り返した。冷い涙は冷い頬を傳うて流れた。

窓の外に友の一生を暗示した様な赤い花が頂垂れて咲いて居た。

思へば淋しい旅であつた。大津で輕鐵を乗り捨て、道は緩い傾斜をなした、四里の坂道、立野から火口瀨に沿うて、宮地に一夜の宿を請うた。丁度八月の始、山の暑さも此れからと云ふ頃であつた。

高燥な阿蘇の高原は、爽やかな、氣に澄んで、四邊の草木は輕く彈力を帯びた、此の谿の中の空氣に、総べての色彩は驚く計りに生き生きして、松は青く、日は麗らかに、其の間を縫へる國道は輕く埃を上げた。

驚の後の悲しみ——悲しみの後の苦痛——抑へる様な感情は、今更の如く胸に流れて、痛ましい友の一生——流星の如く速やかな其の生涯を思はずには居られなかつた。

私は時々、立ち止つて、大聲を上げて泣き度と思つた。泣いたらば、少しは胸の輕くなるかとも考へた。

若い旅巡禮の群は鉦を鳴らして通つて行つた。

小國で晝餉を終まして、二三里行く頃は日も漸々西に傾いた。變り易い山國の氣候は午下りの頃より急に冷めて、豊後路の山は淡く、夕日は遙かの丘に落ちた。

友の家に近づくに従つて胸は騒いだ。家々には灯もつき初め、犬の子一匹通らぬ淋しい街道をスタスタ歩いて、其の夜の九時頃思ひ切つて、初旅の草鞋を解いた。

「まあ、能うこそ御出で下さいまして」

亡友の御母様は嬉しく迎へられた。

其の晩私は遅く迄友の臨終の模様を聞いた。御母様の顔には涙が見えた、そうして最後に一包の袋を取り出して。

「之が彼の形見です——貴方に御目に懸つたら呉々も渡して呉れつて申しました」

と言つて、差出された。其れは折に觸れた斷々の感想録や日記やらで一杯であつた。時々大きく、所々は小さく、無作法に書き連らねた、筆の跡に、彼の一生を見る様な心地がして、私と云ふ淡い對象物に、如何に彼の血が震へ、如何に彼の情が燃へたかを思うて、死と云ふ悲しいが然し脱れる事の出来ない、運命に果敢ない人類の涙を灑いだ。

臨終の際まで、彼が放さなかつたと云ふ夜具——青白い洋燈の光に照された、北向きの部屋に爽快した、敷布に身々包み、天鵝絨の襟に顔を埋めて、私は人らしい内の友の匂を嗅ぎたかつた。

翌の日、御母様に連れられて先づ墓へ参つた。

道々愛兒の死後に兩親の永い事、苦勞した事や、其が原になつて、自暴酒を煽る御父様の噂やらを聞いた。道程は可也に遠かつた。小さな墓の間を抜けて、一段高い所に其の石碑は立つて居た。花を捧げて目を瞑つて、合唱してると、魂が抜けて出た様に思はれた。

「私は御墓参りをする爲に、こんな處へ來ようとは思はなかつた。」

と私は御母様に言つた。

「ふふ」

淋しい笑が洩れた。

何時であつたか、私は「犠牲」と云ふ小説を読んだ事があつた。そうして藤村の筆に表はされた取々の人物を面白いと思つた。

「私は涅槃と云ふ言葉が太好よ」た俊と云ふ作中の女が冷さうに氷を嚙んで言つた。

「涅槃つて、何だか音からして好いわ」

斯んな事からた俊の話はとけて、彼の女の若い悲しい、生涯を思はせる様な——十六の年に、親しい學友に死別れて、其から落葉の燒ける匂を嗅ぎながら、墓畔のさまよひを樂しむ様になつたと云ふ話——其の話は泌む程に嬉しかつた。

そうして、セックスは違つても、感じる思は別々であつても、同じ運命の波を浴びた其の作中の女を想像

し乍ら、石碑に靠れて、ミユチカルな調子を帯びた涅槃と云ふ言葉を繰り返し繰り返した。新らしい愁は二人の胸に湧いた、二人は無言の裡に歸つて行つた。

私は是迄幾度か、運命と云ふ事を考へた。そうして、人間の戀も望も幸福も、此の圈内から、一步も出でまいと思つて居る、吾々生涯の努力——人生の實在に下し得た適當な言葉は運命を拓くと云ふ事ではあるまいか。或人は運命は過去と現在とに在ると言つた。然し常闇の暗い中を、足搜り手搜りして丁度石炭層の坑道を歩く様に先へ先へと行く中にはカンテラの赤い火に出會して、喜の眉を揚げる人もあらうが、多くの人は、其所所に突出した岩に衝突つて淺間しく倒れる——人間の一生も斯んなではあるまいか。

例へば此所に二羽の鳥がある。一羽の鳥は遠くに翔けて、終日彼方此方と餌を漁りつくしたが、其の勞は空しかつた。一羽の鳥は近くに居て其の量は多い。

運命の前には吾々の努力も單なる搖ぎに過ぎなかつた。待ちもうけた物は急にはぐれ、懷に入つたのは思ひ設けぬ事が多いのである。

唯だブラブラ歩いて居る。歩いてる中には屹度運命に衝突つて、泣いたり笑つたりする事がある。

宿命と云ふ考は、長く私の頭にあつた。私を目當にして起つて來る總ての關係——事柄を私は此の二つの文字で解決しようと試みた。或人は之を嘲つた。橄欖の花咲く地中海の邊に、世界の光榮を集めたアラビアの國勢はさうであつたか、内には溢るゝ財力と豊かなる智識の泉を持ちながらサテセンの文化は瞬く間に終つた。宿命と云ふ事に出逢し、宿命と云ふ事に終る人類の最後は動かし難い事實を残した。と論者は説い

た。然し私は之をどうともする事は出来なかつた。

高橋は私には、謎の男である。サワラの砂漠に取り残されたスフィンスの姿が依然として世界の謎である様に、彼は又私の記憶から永久に取り去り難い——解決し難い謎の男である。

謎の男は幾年か経つた今日も依然として、赤い花の咲くと共に、私の頭に浮んでくる。

(明治四十五年五月廿日稿)

人形の母ちゃんへ

し　　づ　　か

あの歌麿の繪のやうな

憎らしい程可愛らしい

ついつばくらの濡羽のやうな

黒いたかほのいぢらしい

八百屋さんごこの夏ちゃんてば

吹くはくしやぼんの玉を

Mitsuba Soapの美しい

薄紫の水泡が

ふはくりと氣球のやうに

青いみ空に吸はれて消ゆる

のつてゆきたやしやぼんの玉に
遠い私のわくにまで

咎めしやんすなわしや旅の者

阿蘇の山から未だ見ぬ

西の極へ……西の極へ……

わしの生れたわくにがごさる

私のすきなあやめの花が

今は咲くやら咲かぬやら

今日は朝からしやぼんの玉を

吹いてくらすは歌つて暮す

Dollが泣きましょ母うちに